

\*題名中に書名が出現する場合は、引用符「」で囲みイタリック体を使用しない。

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は字句の訂正に留め、組版面積に影響を与えるような改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責了とみなす。

八 刷り上り五印刷ページ(四〇〇字詰原稿用紙で一二枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし実費で作製する。別刷希望者は校正刷第一頁の上方に部数を朱書すること。

一〇 原稿の送り先

〒一一三 東京都文京区本郷二丁目一一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

## 編集後記

第三十七巻二号の本誌は、第九十二回学術総会の抄録号です。ご覧のように例年どおり盛り沢山の演題で、その前後が関連するよう順次を決めるのはなかなか神経を使う仕事。今回も総会準備委員会のご苦労がしのばれました。というのも演題の募集などは毎年の準備委員会に担当いただくので、この点で抄録号は編集委員会の負担が一番少い号といえます。しかし一方、誤植に一番ややまされる号でもあります。▼誤植の原因は多々ありますが、抄録号は著者校正を行えないことがネックになっています。いうまでもなく抄録は多数なので、ゲラ刷と校正の往復がスムーズにいかないこと。校正以外の訂正・変更をされても困ること。この二点が理由で著者校正を実施できません。かわりに内校正には編集委員も加わり念を入れますが、とうてい著者校正には及びません。▼ところで今回の抄録にはワープロ投稿が目立ちました。数えたところ二十ばかりで、全体の半数近くでした。そこで比較したところ、ワープロ原稿のゲラ刷は、予想以上に誤植の少いことがわかりました。普通の手書き原稿でも、誤植はワープロ原稿よりかなり多く、編集委員一同が判読に迷う「達筆」な原稿では、数倍以上の誤植が発見されました。▼ワープロを礼賛するつもりはありませんが、少くとも誤植防止には一番のようです。近頃は投稿抄録を手書き以外のワープロ等と規定し、抄録集にそのままオフセット印刷する学会も増えていきます。しかし学会誌を抄録号とする本誌では不可能。難しい漢字や難読の用語が頻出する本誌では、せめて「達筆」よりは丁寧に原稿をお書き下さるようお願いいたします。

(真柳 誠)